

校長室だより

共学共高

第
21
号

令和4年3月16日発行

発行責任者
白梅学園高等学校長
武内 彰

清修との高め合い～合同研修会

年度当初に清修中高一貫部との合同研修会について触れたが、3月16日（水）に今年度2回目となる合同研修会が行われた。テーマは、「主体的・対話的で深い学びの実践と課題点」である。はじめに、高校国語科のS先生から実践例の紹介があった。その後、各教科に分かれて話し合いが行われた。

S先生の実践例を紹介させていただく。

S先生は、授業とは、生徒にとっても教員にとっても「受けるものではなく参加するもの」と考えている、と切り出した。ただ、対話を取り入れることの難しさも感じていて、「時間の縛りがあったり、範囲を終えないと考査もできなくなったり」する恐れもあったが、「回り道になったり、結果がすぐに出なくてもあきらめずにやってほしい」という校長からのメッセージを聞いて、「よし、やってみよう」と決断した、とのことであった。（決断してくれて、ありがとう！）

以下に、S先生からのメッセージを続けたい。

対話とは、簡単で効果的である。生徒と生徒あるいは生徒と教員との間で、一方的に聞くことから双方向へシフトでき、お互いに意見を交わし合うことができる。対話は授業内でいつでもやっている。「ちょっと二人で話して」というものから、20分ほどグループで話し合わせることもある。対話がないときは、ない。

現代文では、「教科書の音読」「意味段落に分ける」「各段落のタイトル付け」「テーマ探し」「設問を解く」といった場面で対話を取り入れている。評論や小説を扱った大学入試問題では、「意味段落に分ける」「各段落の要約」で対話を取り入れている。また、理解できなかった部分を生徒同士で確認し、共同で分析して理解し合い、伝え合うことも実践している。選択式及び記述式の設問を解く際や解答・解説の際にも対話を取り入れている。東大の入試問題のうち、4つの記述問題について、生徒に回答させ、生徒間の対話で確認させた後、教室の前に出てこさせて発表させる実践も行った。大学入学共通テストの選択肢問題では、どれを選んだのか、どうしてこれが正解なのかを生徒間でディスカッションさせた。

古典（古文・漢文）では、「音読」「助動詞調べ」「現代語訳」で対話をさせている。助動詞調べも慣れてくると、グループ間で楽しそうに競い合っている。現代語訳では、グループ内で各自の調べる部分を決めて、現代語訳をしていく。終わったら、お互いに伝え合

う。

S先生から具体的な実践例の紹介があり、大変わかりやすい。授業が目浮かぶようだ。S先生は、対話を取り入れる利点と注意点についても言及する。

利点は、①生徒が自ら発言する ②自分で考える習慣がつく ③受け身の姿勢がなくなる ④集中力が持続する ⑤授業者も態勢を整えることができる、ことである。年度当初にS先生が、「これはどういう意味？」と投げかけても、生徒の反応はあまり芳しくなかったが、三学期には、生徒たちが自分から発言したくてうずうずしている様子が変わったという。教員の態勢とは、対話をしているクラスや生徒の状況を把握することや「次はこういう発問をしていこう」と整えられることだ。

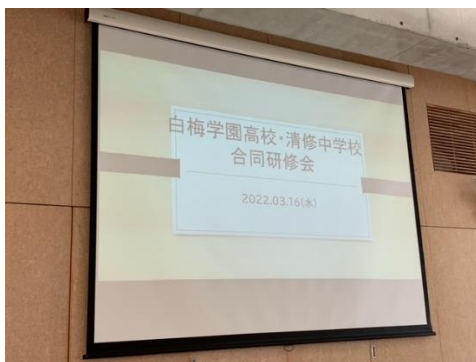
注意点は、①少しずつ毎回の授業で対話を取り入れて、慣れさせていくこと ②クラスの様子・状況によって、対話の時間やどこで取り入れるかを変えていくこと ③焦らずに行うこと ④対話の時間をとる分、進まない ⑤うまく発言できない生徒もいる、ことである。進度が遅れる、なかなか進まないということは、1年かけてだんだんなくなってきた。対話の時間を区切って、あるいは切り替えさせることによって、範囲が終わるようになった。発言できない生徒がいたら、その生徒のところへ行って、声掛けをしたり、組み合わせを考えたりするなどして対応した。

結びに、生徒たちの声が紹介された。「みんなで考えれば、正解が導き出せる」「自分とは違う考えも聞くことができ、そんな考えがあったのか、と驚いた」「考えるのが少し楽しくなってきた」・・・

私が最も共感したのは、S先生の次の言葉である。

「生徒が生き生きとやっていることが何より楽しいし、嬉しい。」

小学生、中学生のみなさん、在学生のみなさん、そして保護者の皆様、これからも白梅学園清修中高一貫部及び白梅学園高等学校の教員集団の活躍にご期待ください。



(共学共高とは：本校のディプロマポリシー（育てたい生徒像）の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す）